

支援くんの火災予防奮闘記

～火災を起こさないために～

Vol.6

お久しゅうございます。ご助です。私の大失態、寝たばこで市民家の番小屋を燃やしてしまっただけからというもの、旦那様との間には、見えない大きな亀裂が入ってしまったのでございます。

幸い、住むところにつきましては、奥方様の実家に良い空き家が見つかりまして、暫時その空き家を私どもの仮の番小屋として使わせていただくことになったのでござりまするが、鍋釜のほか家財道具一式を失った旦那様の痛々しいお姿を見ながら、お近くでお仕えするのは辛いものでござりまする。

ましてや、折々に旦那様がお掛け下さる優しいお言葉などは、「ボケ、カス」とどやされるよりも却って心苦しく感じられたのでござりまする。

それででござりまするかな、旦那様の一言一言に、ついあやを付けることが多くなりましてな。これがまた性に合ったのでござりましょうか、自分でも驚くほどに次から次と悪口あっこうぞうごん雑言の歌が口を突いて出て来るのでござりまする。

これがまあ 聞きしに勝る あばら家か 白い野菊の 床に咲く 　　ご助
いづれにか 表との境いある 玄関に 迷い入るかな 姫蚩 　　ご助
夕立の ^{なごり}名残がのこる 床にいね 割れ屋根より見る 天の川 　　ご助
先人の ゆばり(意:尿)にも似たる 残り香に 幾度めざめ見る 宵の明星 　　ご助
お勤めの 一町ばかりなる 道ずれに かわずとも聞く 馬上の声 　　ご助



と言った具合で、読むたびに旦那様からは
「うるさい！もとはと云えば、そなたの寝たばこの不始末であろうが！」と叱
られはしましたが、そこは鬼界ヶ島の俊寛様もかくあらんとおぼゆるあばら家

で寝起きする身としては我慢できるものではありません。

勢い悪口の対象も旦那様に及ぶこととなり

吾が引く 鹿毛の主を 聞かざれば まことさやけき 蟬の声 ご助

鄙の家 元は雛酒 奥方に 媚びた主の なれの果て ご助

路傍なる 石くれの影に 主見て 青田蹴りこみ ほくそ笑み ご助

と三首に続け、道端の石を田へ蹴りこんだところで、とうとう旦那様の堪忍袋の緒が切れ、

「不届き者め！田に石を蹴りこむとは何事ぞっ！」と辺りもはばかりず大声で怒られましたな。

いきなり大声で叱責され面白い筈がございませんでしょ。腹いせに鹿毛の轡くつわの引綱を離すと、足元の草むらに隠れていた蛙を鹿毛の前足めがけ跳ねさせてやりましたよ。

ヒヒーンッ と掉立つ鹿毛に驚く旦那様・・・と、ここで溜飲を下げる筈だったのですが。

あにはからん、ドオッともんどりうって旦那様が落馬され、更に不幸なことには背をしたたかに打ち、息が出来ないご様子。イカン！と旦那様に駆け寄っ

てみたものの、脳裏によみがえる無様な残像と悶^{もだ}える旦那様のお姿を見るにつ
け、自然と笑みがこぼれてくる始末。

「ひっ、ひいっ、旦那様、御無事ですかい？」と素っ頓狂な声しか出せず、
今度はその声が笑いの壺に嵌^{はま}りましてな。それでも私も中間の端くれ、舌を嚙
んで必死にこらえましたぜ。

旦那様にも私が笑いをこらえていたのが分かっておったのでしょう、苦悶の
表情で私に何かを訴えようとされましたが、私はそのお姿にこらえきれず「ひ
いっ、ひいひっ」と愛想笑いをお返しすることしか出来ませなんだ。

恥ずかしさと悔しさからでしょうか、息を整えた旦那様は、これまで聞いた
ことのない大声で「馬鹿者っ」とお叱りになりまして、これには鹿毛も驚き逃
げ出したのでござります。旦那様は痛む背をさすりながら「おっ、追えっ、ご
助！リオを追うのじゃ！！」とお命じになられたのです。

脱兎のごときリオを追い、駆け出してはみたのですが、これが両の足に力が
入りませぬ。

わき腹に引きつるような痛みを感じ、よろばいながら走るうちに思い出され
るのは先刻の旦那様の情けないお姿。力の入らぬ腹を抱え

「リ、リフォ、リーフォ、ひ、ひいいひいっひい、リフォォ」と叫ぶ姿は我

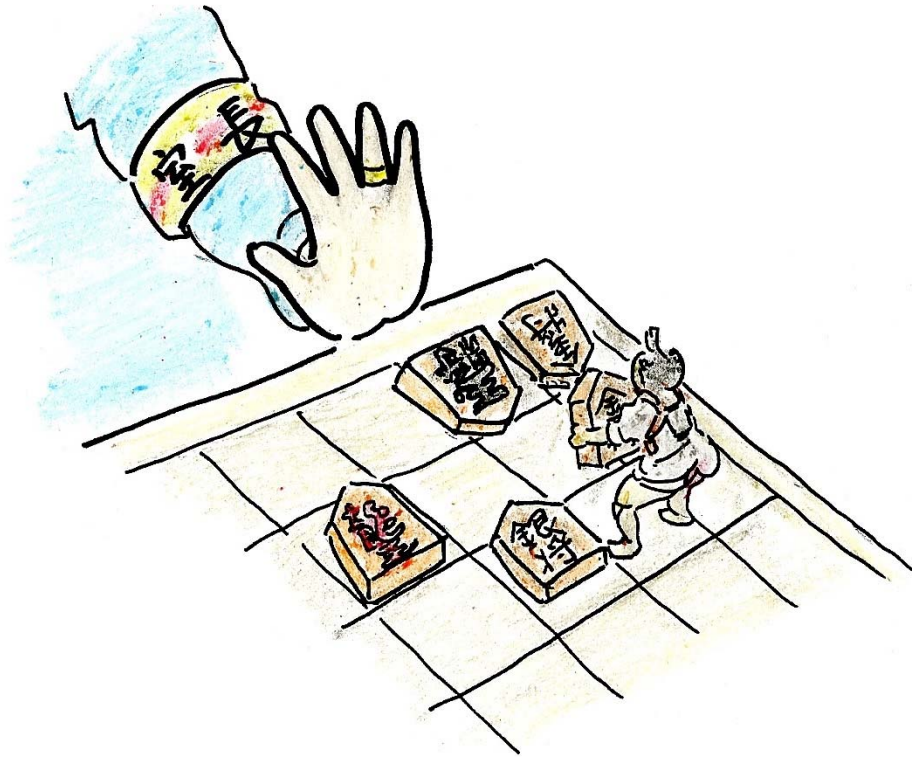
ながら滑稽でござりました。



結局、リオには追いつけず、しばらくしてキゴ山あたりを見慣れない馬が疾走しているとの噂を耳にしました。

愛馬を失ったショックで数日ふさぎ込んだ旦那様の代わりに、私ご助が市民家の防火一切を取り仕切ることとなったのですが、これがまた煩雑なうえ、援姫のお相手まで。とてもものに中間の給金では合わん、何とかせねばとキゴ山をあてどなくさまよううちに戸室のリサイクル推進室長と仲良くなりまして

な。将棋の合間に私のお勤めと件^{くだん}のリオのことを話しておりますと、室長から、将棋の負けの代わりにと、中古の自転車2台を頂くことになったのでござるよ。



紫のスチール製と青のアルミ製。乗りやすいのは軽いアルミ製なのは一目瞭然ではありましたが、物は試し、頑丈なことと高貴な紫であると申し上げ、スチール製の自転車を旦那様にお勧めしたところ、意外にも大層お喜びになられ、以前の闊達な旦那様に戻られたのでござります。

旦那様も私も初めての自転車ではございましたが、自転車が軽い分、私の上達は早く、いち早く前田家に伝わる『三角乗り』の妙技を会得いたしましたのです。

旦那様の方は重い車体の操作に手こずり、漸く右の補助輪が取れたころでしたか、キコ、キコ、キコの音とともに三輪車に乗った援姫様が現れたのでございます。

それからのことは、旦那様が語られたとおり（vol.5 参照）で、金沢城石川門のまいどさんの案内コーナーに飛び込んだ旦那様に、私は落馬された以前の無様なお姿を重ねて見て。

「ひっ、ひいっ、旦那様、御無事ですかい？」と再び声をお掛けしたのです。

「ひ、姫様はご無事か？」とへたれの旦那様に

「あれれ？さっきまでここにおいでたのですが？」と笑いをこらえながらお答えするのがやっど。

石川門から兼六園の方へと三輪車を必死に漕ぐ姫様のお姿を遠目に見ながら、私などより恐ろしく上手な姫よと感心していた次第でございます。

「・・・まあ・・・姫様が無事で・・・なによりじゃ。」と虚勢を張る旦那様。

「だ、旦那様！姫様を行かせてしまって良いんですかい？旦那様も私も先の火災で文無しですぜ。」と慌てる私に

「ご助。何のために共済がある？拙者らは個人賠償責任保険に入っておろうが。大丈夫じゃ。」と脳天気な旦那様。

「だ、旦那様、付帯保険は・・・だから、だから、だから旦那様、私らの個人賠償責任保険は燃えた番小屋の付帯保険ですう。」と申し上げた次第。

そう、日常生活の中で起きる不慮の事故を補償する火災共済の付帯保険はありますが、それは今、住まいする住宅に掛けた火災共済の付帯保険。引っ越しすれば新たに加入しなければならないことなど旦那様には常識中の常識なのに・・・。

この一件の始末は旦那様のお話のとおり収まりましたが、翌日には、あの臭くて粗末な仮住まいにも火災共済を掛け、翌月からの付帯保険にも加入することとしましたのじゃ。

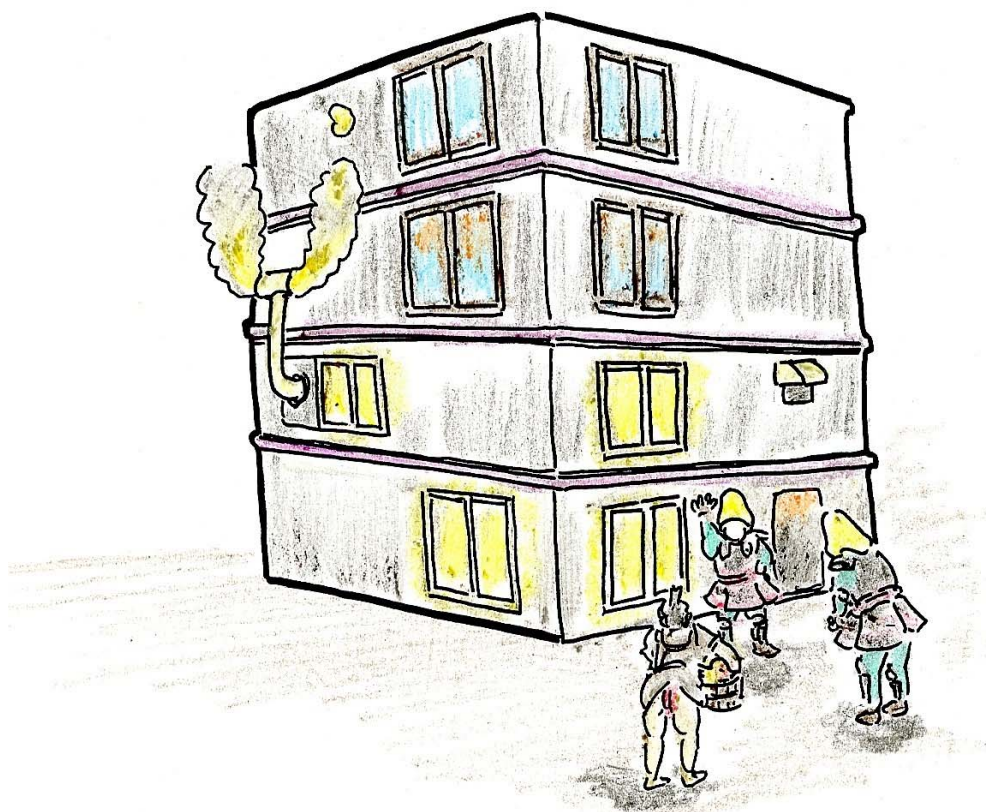
リオですか？リオは下馬の広見から逃げ出したあと、いつのまにか殿様の厩に戻っておったそうで。と、ここまではめでたしめでたしでしたが。

さて、仮住まいの方も二週間が過ぎたころでしたか、以前の番小屋とは違い

内風呂のない生活を余儀なくされた私ども。三日に一度は白山坂沿いの石引温泉に出向いてはいたのですが、夏場の汗ばむ時季のことゆえ、どうしても我慢できない時は奥方様の実家をお守りする旦那様の義兄にあたる支援様の番小屋でお風呂を頂くこともございました。

義兄の支援様の番小屋は4階建ての長屋で、奥方様の実家の両隣のお屋敷を守る、三家の支援様が共同で住まわれておいでました。

その1階が義兄様の番小屋、2階が共同の浴場兼炊事場で、3、4階は他家の支援様の番小屋でございました。



自転車通勤にも慣れ、忙しい姫様のお相手をそつなくこなし、帰宅後に浸かる湯壺。旦那様の至福のひと時。私は旦那様に存分に入浴を楽しんで頂こうと、給湯の栓を全開にするとアヒル隊長など旦那様がお好きな入浴グッズを浮かべておきました。

その甲斐あって「きゃっきゃ、きゃっきゃ」と旦那様はお風呂の中で寛^{くつろ}がれ、やがて湯壺の中で微^{まどろみ}睡始めたのでございます。

旦那様のお邪魔をしてはならぬ、と私は他家の中間を番小屋に誘い、麻雀をはじめたのです。

・・・そしてあの悲劇が始まったのでござります。

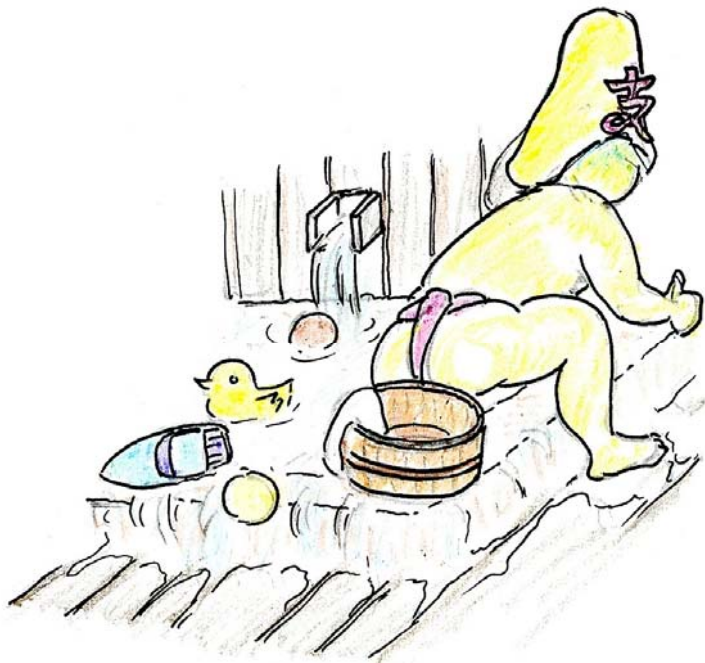


この続きはこの後、旦那様から詳しくお話しさせていただきます。

ご助から続きを任せられましたのでお話し申し上げます。

拙者といたしたことが、久しぶりの湯壺に身を任せているうち、余りの気持ち良さから不覚にも寝入ってしまったのでござる。

いかばかり過ぎた頃であろう、階下の義兄様の「おのおの方、高松城以来の水攻めじゃ！上から水が漏れてきたぞ、ご注意めされ！」との怒鳴り声で目を覚まし、何事か？と眠けまなこで辺りを見渡せば、湯壺から溢れたお湯が床一面に広がり、隙間から階下の義兄様の部屋へと流れ落ちているではありませんか。



い、いかん!!
下は確か兄上の
寢床では!

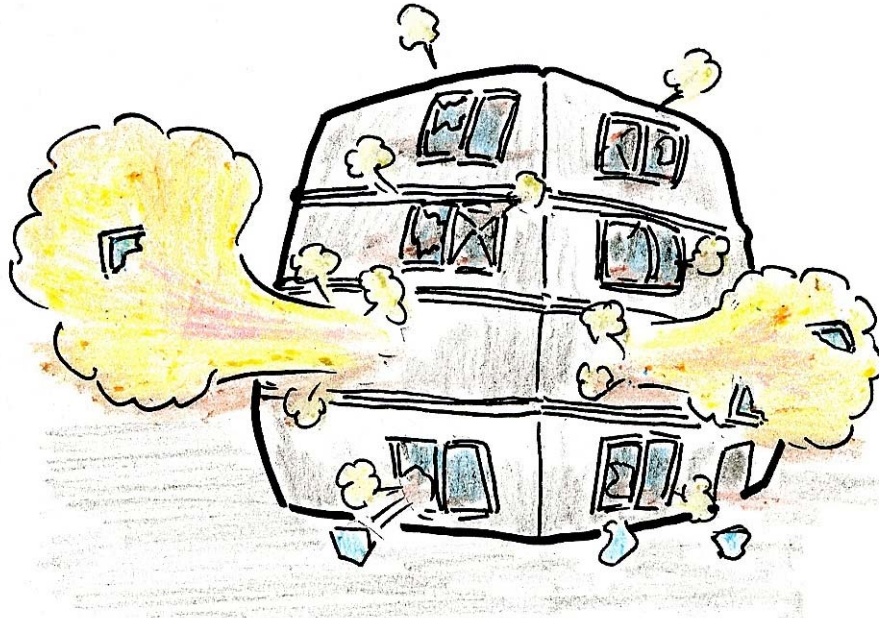
「イカン！」と湯壺から飛び出たものの、蛇口からは滔々^{とうとう}とお湯が注がれ続け、それでも旧式の給湯器の止め方が分からぬ拙者は、大元の止水弁を締めたのでござる。

他家の支援様方も柄杓^{ひしゃく}をもって屋外へと集まってこられましたので、義兄様に顛末を申し上げましたところ「なんじゃふろ水か、水攻めでは無いのじゃな。よいよい、そこもとの付帯は来月からじゃろ？拙者らの火災共済で何とかなりもうそう。で、ボイラーの栓は締めたかい？」と問われた拙者が「へ？」と答えますと「元栓じゃよ、元栓。ここのボイラーは旧式で、空焚きすると破裂の危険があるんじゃよ。」



「・・・あの、」と、話そうとした刹那、

「ドオオオオン」と4階建ての番小屋が皆様の目の前で爆発したのでござる。



「・・・まあ、水漏れも・・・爆発も・・・補償の・・・範囲・・・じゃから・・・」

義兄様の御心の広さに救われた夜でござったな。

のう、ご助よ。

「へえ、旦那様。まことあの爆発には救われました。」

「うん？救われたじゃと？貴様ら中間は全員火傷しておったではないか？なん
でじゃ？」

「へえ、実は私、麻雀の負けが込んでおりました。」

「えへへ、点棒が吹き飛びまして分からなくなったんでさ。」



それから数週間、4家の支援様は連れ立って石引温泉に通われ、その間、私ら
中間は改修中の番小屋^{しょうこ}で性懲りもなく麻雀に興じておりましたのじゃ。
ただ、負けが込んでも元栓が無いのが残念ではありまするがな。
不謹慎ですなあ、申し訳ありません。その發、ポンです。(つづく)

